

張光珮女史の軌跡

—1950年代の日中青年交流のさきがけ—



張光珮女史の近影—80歳の誕生日に北京の自宅で

北京大学と清華大学に挟まれた緑豊かで閑静な住宅街にあるたはずまい。そのマンションの一角のガラスケースには、日本の人形や民芸品、写真等がぎっしりと並べられている。繊細な書画が掛けられたソファに座る白髪の気品ある女性が、張光珮（ちょうこうはい）。「中国語：Zhang Guangpei」女史、元・北京大学教育学部教授である（以下敬称略）。張光珮は、有名な書道家、篆刻家で大学教授の張憲父家の三女として、一九三〇年に四川省成都に生まれた。

張光珮の日本との出会いは、ドラマチックなものであった。それは一九五一年の春、重慶にある西南師範大学歴史学部の二年生だった時のことであった。突然、大学から直ぐに首都北京に向かうように告げられた。その日のうちに小さな荷物をまとめ、汽車と船に乗り次いで北京へと向かった。「何か新しいことが始まりそうな予感があった」と彼女は当時を振り返る。

当時、北京に迎え入れられたのは、中国各地から北京大学東方言語学部を集められた三〇名余りの若者たちであった。そこには、建国後間もない新中国の国際交流の担い手となり得る優秀な若者たちに主にアジア十数カ国の言語を学ばせ、周辺地域の良き理解者を養成しようという中国共産党政府内部の指示があったようだ。とりわけ、将来のアジア地域の周辺諸国との国際交流のための人材を養成しようという、当時の指導者の周恩来総理の意向が強く反映されていたといわれている。当時、まだ日中間

親愛の廖先生并各位朋友們

我們高興地收到了你們的信。

去年十月，日本青年團協議會代表團來我國進行訪問，加深了中日兩國青年之間的親善友誼。在代表團團長，團長張光珮先生曾與中國青年相約，希望不久能在東京相見。現在，由於你們的盛情邀請，使得中日兩國青年的這一共同願望實現了。我們衷心感謝你們的邀請，並特選派十名各階級男女青年代表去日本訪問。

中國青年能夠有機會與廣大日本青年見面，直接表達出一億二千萬中國青年對日本青年的友好感情，感到十分愉快和興奮。中日兩國人民和青年之間，很早就有了歷史的傳統友誼。這幾年來，由於我們的共同努力，特別是貴團體和其它日本青年團體的努力，我們的友誼又有了新的發展。我們深信，通過這次友好訪問，不但能夠加強和鞏固我們兩個青年團體之間的密切聯繫，並且將進一步增進中日兩國青年的相互了解和友好合作。

當中國青年代表團到達日本的時候，正是春光明媚，櫻花盛開的季節。我們很高興能和你們一起，迎接這個美麗的春天。讓中日兩國青年為友誼與和平的共同事業，象春天一樣得到迅速茁壯的成長和發展。

請再次向你們致意，並通過你們向日本青年朋友們致意。願我們早日在東京相會。

关于代表團的名單和經歷，一併附上，請閱閱。

願你們身體健康。

中華全國民主青年聯合會主席 廖承志



1930年頃に成都の自宅で撮影された張家の家族写真—最後列の赤ちゃんが張光珮、左隣がその母親の鄒慧修

1957年3月に廖承志が日本青年團協議會へ宛てた書簡（日本青年館所蔵）

に国交はなかったが、二〇年後には中国と日本は必ずや重要な関係になるに違いない」という信念に支えられて、張光珮は日本語を学ぶことを選んだのであった。

やがて一九五七年三月、張光珮は中国共産主義青年団の一〇名の代表のひとりとして日本を初訪問した。それは、一九五〇年代の日中青年交流のさきがけとなる出来事であった。前年に日本青年団が中国へ渡った後、翌年に中国側が日本を初めて訪問することになったのである。彼女たち一〇名は、第一回中国青年代表団として、一月月余りの間、日本全国各地を回って日本人青年たちとの交流を深めた。

中国青年代表団の受け入れ先となった日本青年團協議會を組織する日本青年館（東京都新宿区霞ヶ丘町）の地下倉庫には、当時の日中青年交流に関する貴重な記録が残されている。当時の中国側のメンバーには、団長の劉西元（中華全國民主青年連合会副主席・元人民解放軍中將）をはじめとして、副団長は呉学謙（同会国際部長、のちの外交部長・副総理）や楊振亜（同会国際部員、のちの外交部アジア局長・駐日大使）等が含まれていた。当時、北京大学院生であった張光珮は最年少の参加者であり、通訳も務めた。日中間の青年交流を通じて、のちの中国における数多くの知日派の知識人が誕生したともいえるよう。



日本の青年たちに囲まれて歓談する張光珮



日本青年團協議會の雑誌に掲載された訪日写真記事—最前列の男女が張光珮（右）と楊振亜（左）。張の左後ろが団長の劉西元、一番右側で本を持っているのが呉学謙（日本青年館所蔵）

みんなで「春が来た」を歌ってなかなか愛嬌たっぷり 左から伊義、王達祥、楊振亜、張光珮、鍾沛璋、劉西元（団長）張光珮、卞霖、陳銘珊、呉学謙（副団長）



歓迎会で唄を歌う日中両国の青年たち—左端のリボンの女性が張光珮



東京—北京を結ぶ……うでを組んで声高らかに歌う日中の青年の心は 国交未しといえども平和と友情に固く結ばれています (3月23日10名の代表団を迎えた日青協歓迎会で)

日本側主宰の中国青年代表団の歓迎会の風景 (日本青年館所蔵)

日本政府に何度も掛け合った結果、ようやく訪日が実現したのである。

一月余りの日本滞在の間、日本全国各地で座談会や交流の機会を持ち、当時の中国の若者の生活様式や考え方について紹介した。「当時の日本人の若者の間には、新中国に対する強い憧れもあったようで、中国の情報がよく限られた状況のなかで、私たちの話に熱心に耳を傾けていました」と彼女は当時を振り返る。但し、当時は日中間には国交がなかったことから、政治的混乱や摩擦を避けるため、代表団の青年たちが自由に街を歩くことは許されていなかった。

帰国後には、中国の各大学での講演等を通じて、代表団の日本青年との交流の経験は中国側にも届けられた。参集した中国人たちも日本の様子を熱心に聞き入っていたという。

やがて文化大革命による中国国内の混乱を経て、日本との連絡が途絶えた時期もあった。しかし、同じく北京大学で日本語を学んだ夫の彭家声・北京大学大学院常務副院長、国際関係学院教授とともに、一九八〇年代から九〇年代の初めまで、中華人民共和国駐日本国大使館教育処に二度にわたって九年間勤務して、改革開放開始以降の両国の教育と留学生の交流事業にも注力した。

日本から訪ねて来る人があれば、古い友人も新しい友人もまるで家族の一員のように温かく迎えて、ともに食卓を囲み夫婦で「民間大使」のような役割を事実上果たしてきた。八〇歳を越えた二〇一二年春には一〇年ぶりに日本を訪れて一九五七年の訪日時に出会った人々を含めた日本の友人たちとの旧交を温めた。

しかし、そんな張光珮も先行きのみえない最近の日中関係を憂える。かつて初の日中青年交流によって日本と中国との間の相互理解が深まった。地道な草の根交流によって信頼関係を構築することの大切さを張光珮は説く。それは、政治的問題に縛られて膠着状態に陥っている現在の日中関係にこそ最も必要とされているものなのかもしれない。



中国人留学生の世話役的存在であった土屋暹・大和市日中友好協会会長宅で (1987年)
—後列右から2番目が張光珮、前列右から3番目が彭家声



中国駐日本国大使館教育処勤務時代 (1980年代)
—右が参事官の彭家声、左が一等書記官の張光珮



2012年に10年ぶりに日本を訪問した一夫妻が師として最も尊敬する大田堯
東京大学名誉教授・元日本教育学会会長との再会



1957年に潮来で出会った日本人青年たちと30数年ぶりの再会を
果たす（1990年）



60年余り過ごした北京大学正門前での家族写真、右から彭家声、
張光珮、娘さんの彭浩一彭浩さんも同大学出身で、日本の大学
で教鞭を取っている



再会を記念して潮来で行われた日中友好懇親会

《参考文献》

- ◆共青团中央国際連絡部『為了世代友好—中日青年友好交往回顧録』（北
京・中国青年出版社、二〇一一年）。
 - ◆日本青年団協議会日本青年館所蔵資料集「昭和三一年度国際交流綴 訪
日中国青年代表関係」。
 - ◆日本青年館史編纂委員会編「グラフ日本青年館と青年団—青年と青年
施設の歴史」（財団法人日本青年館、一九八八年）。
 - ◆日本青年団協議会、日本青年館編「大河の流れのように—日中青年交
流三〇年の歩み」（一九九〇年）。
 - ◆劉全勝「一九五〇年代に於ける日本青年団協議会（日青協）の対中交流」
（東京都立大学「現・首都大学」教育学部博士論文、二〇〇八年）。
- 本稿は主に彭家声・張光珮御夫妻への筆者のインタビューに基づくも
のである。同取材に全面的に御協力くださり、数々の貴重な写真を提供
してくださった両氏および彭浩・中央大学教授に深い感謝の意を表した
い。また、日本青年館の掛谷昇治氏、および劉全勝氏にもこの場を借り
てお礼を申し上げたい。

まつもと はるか／アジア経済研究所 東アジア研究グループ

主著に「政権移行期における中国の外交—『平和的発
展』路線の行方」（大西康雄編『習近平政権の中国』
2013年）、「冷戦後における中国の多国間外交の展開」
（佐々木智弘編『現代中国の政治的安定』2009年）等。